

小論文

受験番号	氏名
------	----

〔問題〕 以下の文章を読み、設問 1～2 に答えなさい。

いま、言葉の時代だなと思う。写真や動画が、かつてないほど手軽に撮れて発信できるので、「いや、言葉よりも画像の時代でしょ」と思う人が多いかもしれない。確かに、仔猫の可愛さをわかってもらうためには、百の言葉を費やすより、一枚の写真や数秒の動画のほうが雄弁・・・・・・・・ということはある。

けれど、コミュニケーションということに関しては、時代の中で言葉の比重は増しているように思う。たとえば、生まれ育った村で一生を過ごすとしたら、周囲の人とのやり取りは、言葉以外のものがたっぷり助けてくれるだろう。なんなら、笑顔を見せるだけで、こぶしを突き上げるだけで、いつもと違う服を着ただけで、あなたの気持ちを伝えられるかもしれない。ひと言つぶやいた「いやだ」という言葉の背景に、小さいころからの性質や日ごろの習慣や最近の体調なんかも加味して、理解してもらえるかもしれない。小さなコミュニティでは、わかりあうための情報として、言葉は数あるものの一つに過ぎない。同じ言葉を発しても、「この人が言うんだから、よほどのことだ」から「また言ってるよ、しょうがないな」までグラデーション付きで伝わってゆく。

「村で一生」は極端な例だが、このような「個人の言葉の背景を理解してもらえる環境」ではないところで、多くのコミュニケーションをしていかねばならないのが現代社会だ。家族や友人、恋人同士などはこの限りではないけれど、行動範囲がグンと広がり、ネットでのやり取りが日常になっている今、背景抜き言葉をつかいこなす力は、非常に重要だ。それは、生きる力と言ってもいい。

村の道なら、すれ違いざまに肩が触れたとして、「あ、ごめん」と顔見知り同士が軽く会釈をすればすむ。それがネットでは、大事故になったりする。相手のバックグラウンドを知らないまま始まる言葉の応酬。そもそも前提としている常識が違えば、互いに「なんて非常識な！」ということになる。イメージとしては、違うルールで高速道路を走っているようなもの。さらに SNS の場合、事故で燃えている車があるという情報が広がると、消火活動よりも、何故か油を注ぎに来る人が群がるという傾向がある。いわゆる炎上という現象だ。

便利で、やっかいな時代を、私たちは生きている。顔の見える関係が広がった先に、さらに顔の見えない関係が追加された。

「顔」といえば、思い出すエピソードがある。電車の中で「面と向かって電話した」と聞こえてきたのだ。その時の驚きを拙著『言葉の虫めがね』に綴っているので、抜粋してみよう。1999年出版のエッセイ集なので、今から四半世紀前の言葉の観察記録である。

あるとき電車に乗っていたら、若い男の子が「オレ、そんなときばかりは腹立って、面と向かって電話しちゃったよ」と言っていた。「ん？」と思って耳をダンボにする私。面と向かえないから、電話をするのではないか？この子は「面と向かう」を間違っていて使っているのだろうか……。が、よくよく聞いてみると（失礼！）そうではなかった。話は、こうである。

その男の子は、日常的にパソコン通信をしているようで、近ごろ通信相手とかなりひどいトラブルがあった。ちょっとしたことなら、電子メールで抗議するぐらいですませるのだが、あまりに頭にきたので、そのときばかりは電話をかけて文句を言った——と。つまり、電話をかけて肉声で直接話すというのは、彼にとっては立派な「面と向かう」行為なのである。

私たちの日常において、電話というのはかなり「濃い」コミュニケーションの部類になってきているようだ。かつて電話が登場したときには「そんな、直接顔も見ずに、機械を通して話をするなんて、非人間的だ！」という意見があったそうだ（この話にはオチがついていて、電話を使って人々がまず何を話したかという、次に会う約束についてだった、とか）。

今や、電話が非人間的なものだなんて、誰も思わないだろう。急速に普及しはじめているファクシミリや留守番電話に比べると、肉声がリアルタイムで聞こえる電話というのは、かなり生々しいとさえ感じられる。

「耳をダンボにする」という死語はさておき、電話での会話が生々しいという感覚は、今ならより共感を得られるのではないだろうか。「急速に普及しはじめたファクシミリや留守番電話」は下火になり、昨今はメールが主流になった。

出典：俵万智『生きる言葉』、新潮社、3-6、2025年、一部改変

設問1. 作者が下線 背景抜きの言葉をつかいこなす力は、非常に重要だ。と述べている理由を200字以内で記述しなさい。

設問2. 言葉が生きる力とも言える時代に、言葉(コミュニケーション)の力を鍛えるための取り組みについて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。